門 利
歸 1589
卷

春

立春

あふ坂の関の清水に春たちていまはしるらん人の心を

冬ながら春にあふ坂の関の水はるかに見えし人の心を

梅

梅なれぬ心を

見渡せば春にぞ霞む梅の花ぬしは誰とか人の問ふ

故郷霞

和歌の浦に猶いくかへり古を思ひやるかな霞こめる

霞

ひき渡す大原山の横雲すくるる峯や煙なるらん

明治四拾四年三月十八日 購入

霞蘭閑路

春ごとに花さそ立けるおぼろ哉　なつかゝ利

おもなしさろ哉

宇治橋行末よりをみく林山嶽乃木幡の岡と霞ゆゑつゝ

海道　嘉

大貳重家卿舎

春霞たゝる比ゆゑ波乃こえとをみゝを未み松雪

わたなし心哉

あさゆるゝ月乃ゆみかゝとを見渡せい霞ゆゑ波乃浦

晩霞

二通ゝ千首会門

猶ゆきて交野の市野よ立ゝ見ゆ明さわもみゝぬ夕霞哉

嘗

古巣より乃ゝ初ゝに渡りそむるハ嘗ゝ也

竹間殘雪

呉竹のふるく雪乃やゝ消ゝるゝ乃くゝふ見ゆるらん

池水澄静

春風や波乃川もかりふのさゝんゝ哉とせぬ池の深ゝ

嘗

松上嘗

武和布州吉野山ゆゑは嘗と本偽ひ渡る天乃橋立

毎朝嘗祭学

よみ侍りしゝ

二条大宮ゝて人ゝ

日数行たひの庵を立ゝに雪於ゝさ嘗乃勢

伊勢国服部ゝ安房ふゝゝゝひて世ゝさる事

かゝひきゝ程ゝよ　あ　ゝを明る事ゝやあゝん

久しゝ侍ゝゝゝゝは二月の比いた

ちるゝ梅の枝みはをてつゝ
こゝはさたいはてと夜るて梅を枕絵ゝ白ふ高み
ゝ

梅ゑちるゝ夜るんちゝてはそれゆへきてゆむと云い
よろこひ〳〵く侍る比あひ志りとりけゝ女はよ
ゝひはゝいさりしかば見よりつゝ不ゝたゝ
梅乃枝よ折けゝ云つゝ
海ゝ梅枝ゝとゝいさゝん云ゝ梅枝我ゝ思い
ゝ

ゝ移て我思ひ云ゝる梅ゝ枝ゝ多人ゝ多ゝ思ゝ
清浦殿長家舎
薄家梅
一枝とあむゝ多ゝ梅ゑ白ひい云ゝ人ちゝ云れ

新院御時屏風裏よおゝ海ゝ比大内
作を所ゝ後鶴殿乃梅枝花ちゝ多ゝ侍き
を小舎人ゝておゝりゝ侍ゝけゝ枝ゝ折ひつ
けて多てまゝりゝけゝ
九重ゝ内に白ゝる梅乃花と云ゝちゝきゝと四ゝ
ゝ
九重ゝ内おゝ多ゝ
無名内侍
みゝ春ゝ内なれいあゝ春ゝ不ゝ
年ゝ乃侍作ゝ不を大宮乃御所ゝ
されゝ次の春乃梅候たるを多て下枝
よむゝ
春ゝ

梅の花もうつしをもとめて書あつめやと待るうつし花白梅つき

梅花薫窓中

東風ふせは梅ふく方小窓をあけて白を開はの内へ入る

二條院御時　樓中柳

笠もいのをもつくる屋の面よりまつ緑なる玉柳かな

仔賀入道舎

雨中柳

春雨に柳のうつ枝あつまりて流に風ふそ吹そ

常

谷近き宿の雪や常はれ里なれそもる姿なるらん

梅契多春

一日代乃春をそ咲宿れ梅を命とかなや多春さん

鷺舎春友

谷まてもはのれ梅やみや常はれまつ沈ふさうの枝のうつ

待宵似恋意

いもうとを思ひ出をるを我ひそうあ間の

きはうに沈れ世の大内れ月をとや待

よ未ひうをの月よつをくはうひうう

思ひやをを春ふと待花れ咲を果ぬよいそくんを

加屋

あつの事ぬいそくうせい咲ぬ花をいをそ待もはて

南殿の紅葉を大納を実房を女房にまうう

臭して大内よりうしりて待ちよいひうう

ひうるうた海うる位の内るれいをうを春よ位うう数

題

九重の内近く人民居いまさて花咲風流いまさめん
南殿のむさうる侍事院内の女房さと門裏
より見まさういろ〳〵咲りさ咲る扇乃侍る様
わろか表侍て花乃色深さ〳〵もさ侍
れたる様こそ
百歳乃花よん様とめ玉ふ咲ゆん乃ふみ花ゆん
うた
花よりて道よまとうてさめん公乃ふ〳〵咲れとそ
二月乃花ゆんたち侍もまう〳〵侍程よりより
つくりたる様ゆませくて和れう〳〵かさして
侍のり乃ふ乃ふ様をそとりゆんのくちろ

さにむうひる侍る侍る様乃ふ様乃ふ様ゆまう〳〵咲ぬ
程よあるべのもと〳〵氏告を侍侍のそ侍とて
恋のもむ宿乃稍れさうぬまるめ〳〵ゆれと花ある
うた
見さうなりちうてやむ〳〵侍ゆれい宿乃稍い侍れ侍り
花
様花乃るに付てもろう〳〵侍花ゆん後乃ふて描さる
建盛ゆ家ゆ会の写ゆ
春月
春ぬまいむよあ〳〵て南ゆるんいつもり表の様の月
左下月明
たゆ大夫家舎
花咲るなかと思ふぬ表の月侍やそてくうさて三月の
春あつまれ宿〳〵侍ゆる花の様乃侍侍て

東路や春もなかばに行旅ハ咲あふ花にえそちかき日数
人こゝろよくしても見侍りしに法勝寺の
咲増る梢やあると尋ハ長宗に宿れ共ハ見そこまし
白川まて人こそゆかし侍りけり
そのはかり花の下ふしやすらへハ何ぞやと思ふ人もさそはり
深山花
太山木の其梢ともみへさりし桜ハ花にあらはれにけり
山桜花もちらねも白雲乃高根ハえこそ桜こそ稀
こゝろかたなる雨に桜花咲くりける梢ちり見え
えきれハいつもよりもく
桜さく梢をこれやと尋ぬれハそなたの風も結とえさえ
かなし

花ちらす風残り給えくちまりくハやかて蹤乃歌にもとまる
落山花　宰相入道三首合
むさそ嵐山下風乃吹残しとめて道にもあらぬ花ともふむ哉
遠落花
くやしくも船のる雲にまかせつれ共も奈き山路に秋ハきにけり
水辺花
ちくらまと水にさかつく梢たるハ花の姿の沈にそ有ける
さくら哉　定家卿三首合
近江路や真野の浜辺に駒とめて比良の高根の花をみる哉
あなたし人のことゝまて花の方とて
咲そく後や我身に留てまん花咲ハ宿るとかゝるまてたハ
花　橋別三首合

梅花さきる國に東よりあるよしもちゝ侍てあるる
花ぬきに程をへたるとおもゝやうにうるをむかしの移て
我家の花を移さゝやおもふんとの梅のまさほんに
常よりもむの梅は侍るゝ嚴の白雪
梅さく梅に雪ふるゝ白雪とよゆるいむの國ゝ
今日いくゝ日か春の雪とゝゆるいむの國ゝ
人ゝ白川の花ゝまきしよ鶯鳴花流の花の
下ゝて三の歳傳ゝ
年ことに山家とて梅花ゝ春の初ゝ
嚴花は心に
嚴花は我家ゝ
歌林苑ゝて人ゝ花の三のゝ
むさゝは春よりしゝ侍るゝ侍也馬ゝ
大内の梅國ゝ侍て侍ゝ
ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ
意ふい百明日ゝ雲と歌ぬ野に梅ゝ人ゝ
西
雪とたゝゝ花花の雪ゝ
逢撫子同花心に言林苑ゝ侍ゝ
ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ
老後見花
いゝ人ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ
ゝ侍ゝ
ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ

ちく方よりかへりてはるかに清潔れど花やうやうにして我をうら淋

帰雁

今ハとて春ハ田面を立雁の声こそ清行方なきを思ふ

行なく心残

頼政卿長の会

天津空ひとつよりゆく越の海乃波をふまてゆるかりかな

湖上雁

ゆく雁数知らぬ時ハいつ也南より吹きて風

大網を実に南殿の花ハまいりてゆく

後雁ともなくて

よもすがらうけるくこえて

雁ハ自ハゆく計て本乃ちかまこそ

ゆく雁ハ

えりめるうさい花ハそ然へはるとゆるこいみくハこそいるめ

八条院歓喜院光

てゆくと尺くくそ

とりそくて桂

地下ふて作

南殿の桜盛よ上達部上人

ゆ

水上落花

よ

川岸波の波よる花やまこ根ら嵐よ消ら白くる

落花

吹ちらす梢乃岸波花原風ゆをたゆる雪ちとそみ

おろ心残

按察公通舎

散をそ〻ぎ梅の花の盛なるを折て

いまた殿上にのぼらさりしの事なりけるに侍に

二条院の比の三月十日比に行幸ありて南殿

の梅さかりなる枝一枝おゝせらるゝ去年今年

といふことあると作らせられて侍りしは梅をも

さてひ物てまゐらせ侍りし

をりの事なりしを面白くなつかしくおもひ

出まゐらせ侍りしを

舟後内侍

さきそめしあもの新るをそ見さりしこゝ

ろ

梅を船中見花

はるゝ〻渡る山近くさくら花のこゝろをねにかけてとそ思ふ

谷梅

うけ渡りてあ方流の梅の枝の後日より

梅枝

春を待に梅枝をそ折てとおもふ家歌合

春

山梅

春見るまゝに春なる人を恨てや春をとまらむ

三月十日あまり乃日とる内の女房さと内裏

より大内の南殿の花見ふとて部屋上人を

ひきくゝまゐりて出さるに歌あるを

うき集てはるの花とひとちまゐ花をかさ集ても家にとゝ

花ゆゑ風ふひとひとちまゐ花をかさ集ても家にとゝ

うゝ

いとくもとも花をつゝいさあもり家をとてもあつとてる

かくて後夜に入まて此人こゝにひとり来臥くるに程なく
あくるとて陽明門より人数舞を云はつゝ行る
数はりる花いしはらと人こゝろ風乃拂ふいまゝとをいく

西

荻もぬけ風とおろせくるとといつゝ行るるを見ん人とまとむ

春野

冬枯乃野の人は霜やを程ふれいなよ蕨て落出る春の新

折蕨遇友

冬はらきこゝろをあひぬ早蕨の拂よく我も野にこゝろ勝り

花前客稀

ちるうしに程はまもるくこゝろ人のむふゝ多ゆけとこゝろさ

水上落花

山桜の咲ありとい初瀬川未くむ見れ人や高原〳〵春

落花

むいこれ此りぬとこゝろのよ母我なくさあよ嵐の高〳〵こゝ

おなし〳〵此大内まて南原はむ乃下まて上逆

ア殿上人よまれ

もこれ雪ふるとみれい丸童に散かこれ生むみて有る

古宮花

ふるこれ海乃沖行みてるこゝぬ高津の高は花やこゝん

荻もぬけ風の梅園まて人こゝ高横はりしよ

荻消も行よるる高原ちるうこれる拂よ風や次らん

あるはし心を

あるるぬ拂乃元とに咲ぬ荻はこれ荻はこれ荻の荻と高ぬ

大内めて殿上あく萩を映水と云心詠侍る

住吉に乃行よ松乃ちりせはたゝに萩咲ちるを見て酒や

萩を留客

乃るへ咲ぬるかはゝさね萩乃をそひまつとれ〻とゝ

杜若

さゝぬたよ行方も乃ぬ沼水に めくりふ立る杜若ゝ那

鄭嗣をよめる　経家卿

今日乃みゝ乃ぬ沼水白波〻いそ伝保姫深のゝ乃ん

流下歌冬

流の糸にぬきとめ〻ま玉に萩をとうく侍独りとみゆる山吹

陳家歌冬

山吹の花咲うゝやゝ中垣ゝあるゝよいくとゝよ比の春

春歌二月とゝよ乃伝

かゝめゝも今萩も更ぬ約束をいのちとゝ思ゝゝゝ

三月尽

ゝゝもゝて花もかゝ〻くゝよ萩ハ多ひく拾思ゝゝゝ

山三月尽

いゝゝ秋山乃ゝめゝあゝふまを限とゝゝぬ生ゝゝ〻

夏

六位めて御時更衣乃心をよみ侍

夏衣みとり乃葉もかゝりせは心おゝちやゝしゝ海

大納言興国三の会乃

更衣

竜ふやゝ六月花ゝ乃ゝゝかゝね侍ゝよ引ゝ侍ゝ

卯花

神さびわたるかもとうたはれたる佐久さんの小屋の袖垣に咲きたり

暮見卯花　　安井雅楽寛之

市ゐも牧卯花出越岸そのさく咲ひくれいとそなるめ

卯花　　重信

卯花乃垣根をとうとう又月夜あさきしつる布とみるハ

卯花陽水

卯花のこゝ川せ垣根よ咲ぬれいるめぞ流乃浣乃ゝとうを

夜々鶏川

うひくゝ乃ゝ乃ゝ加ゝ伊簾夫乃みゝぬ兼もなきゝりつやゝ

旅宿郭公

春さは出ひ半ゝて紀寄いりとは秋立も物川

月前卯花

照月に色はさゝまて卯花乃下枝をのみそ無根とみる

国次月卯花

いやめ夏ゝく〳〵月夜卯花のうちひて物も実うとそゝ

人待郭公

ゝ親守川とゝうゝ人待さゝ又ゝくゝ伊とまゝ兼そなき

待杜鵑　　公通公十七歳金平

思ふ伊ゝ何ゝと人やゝうもゝん山時なけさハまゝ川牙を

夏草

男原寄ゝ夏野の草を分紀ハ分まれなりなりゝ蘇

躑躅麦をれさる紀とのよ多くひて

おゝてゝこと我身ゝ夏草ゝ知まに家乃をゝんる紀ゝを

竹風夏冷

と此くの面白き事共我くるる竹乃林者よりいさ清る成
竹の清よりそむと云ふ成清作
吳竹のあるり深さうあるを移さ手をるくたること成
結部云ふを人をうるみ作りて
る歌をふと乃枝さめせ、その一さちち成まるこまるとの成
おれ人成
待久と我もやさうん時名をあるなりせいろ家ろくしく
時名成
香ととめて山杜鵑おちくやと聞けたち花
四輝の清ろうまて部云山とふ方成ちるめらそやれ
わくこめ成作を遠よほのめくいくのもと此上やとる志
集云よ時名成作ろく

霞云ろくもめうう待ろめふいわとろくろみ取て弱るく
念佛法待部云と云る成人をうみ作りしよ
面白きうもくをおとくほもいきいよ新ろる部云が
海辺時鳥
詠其ようるろうもてろう部云ろ法いるを四歌ろと和
三位大進清輔家やきて後又月部云帰とこし
てゆ法りしおた
かくこり者ろ今とてる歌集を多りわと空やさろ
ろ面
時名い法と高せねるくひとて有けろとも思ざりり
深夜時鳥
結まくこ人の公成くんとそや山ほとをた新をふろを覚

郭公

結けるとまことしりがほなる子規なほ気ふさみこもられぬる

夏草

春ゆくとうくるみなるはまさくとなりにけるかなる物ゆゑ

病気の子規の心ぜん人くるみ作りしよ

うあ行の夏よ安なたに郭公うぐいすの声よ見ぬ所ちと

郭公

時鳥まことそきうね我よふあみちれ乙れ感なる後と

世代中をゆくて鳴子規あなたの西のほうれもこまく風雅

一歩ゆくやうよるとく郭公をゆくりなきをさるほ野利

霍公ゆくてるとる名残をとる月なりとても稼やそせぬ

野往子規ノ

範兼公家合

兼兵衛佐公家合

月舎

郭公ゆくとしの方根の郭公なるその通ハ勢ことなる

むかし成ハを梅雨ハく候ゆるる梅をれそうんそる伝

る程よ又ほ子成て郭公ほ鳴なきて隣よ内ゆ流

と思ひく

子規内ハ内うんハんきそうん一隣の子規の梅のこ内人和

宰相中将

郭公共ハ内けと梅ゆゆ枝ゆそとそもゆゆそ

又月十七よ子規ほ枝ゆそもゆゆ

ほゆそほ内ゆるゆる別尚(さらに)

時鳥ゆゆゆ内の山里ハ人ゆゆ内ほ人ゆ

うゆ

霍公ゆゆゆぬる内ほ山の月ゆ宮古乃くとあとゆ

ゆゆ

夕郭公
今日も又山路に染めし衣して帰るさ迄も霞むらん
おなじ心を
吉水院にありし時名もしらぬ人と逢て
月前郭公
一声も月に入りぬる夜半の心ぞ山ほとゝぎす待つ所
山家時鳥
郭公は待つも人松の戸に郭公なく声をきく山家の里
法性寺殿御
郭公漸稀
今更に聞きてもやらぬ一声を五月の来ぬに夜のとこしさ
五月雨の比に待ちつるひとこゑを帰りける夜の
待ちし月の行かくれしこの八大寺に小待
待ちぬと安くちりける花ゆへになりけるはやつゝ
かへらぬ
高きにも我とひとり生なる我は千とせやめでしと見る
近江
雨の日のかたみなりける井はそこなりけりと人なとう日にそ咲
魚橋蕙園
安林菴含
かけりくる魚橋の石とかけゝる男子の麻衣をたち
魚橋蕙遠
有が里のせ橋の白ひげとこは今しぬる日の花入
法性寺殿含
又同雨
又日雨の日はふるまゝにいつ見きは池の水の色は浅く成けん
六月十日比に更悪郎六とて心の後波にまて

人とよみ侍りし女房よかりて
時々今はこゝろ〳〵と思ふなれて行ゝよりもをいとゝ行き絶
水風如秋
浦風の波上に多てる涼さるゝ姿のとゝ思ふ夕暮
江上望多
鳥羽院御百首
いとゝその蛍は数々ふるゝ秋の草乃ゝ〳〵ぬ繁でなる
水鶏
くゝなとゝ思ひもあへぬ時なれ人絶る宿は数まさりて
夏雜警寢
心なく物をおもふ人なれはまゝ叩そ
三条殿家会
連夜鶴河
かはゝ女や彩花さるよりくいとゝ〳〵鶴乃と秋とれぬ
三条殿は時女房を召りて
河辺深
小舟入はこの細江よりはて竿の末をつく行まくれはし
泉
大宮ゆせ〳〵の水ゆ流をそていくもせ〳〵秋成ん
泉辺翫月
たゝ花家会
夏月
庭の面ハまさこのゝ如ゝ久立れ月さく流る月氏
水上夏月
波ゝ流ゝ水ゝ上ゝ夏の淵の底ゝ魚ゝ月をなこのめ
水辺納涼
夜も行舟をれ水れ来るれと富士乃門ゝを出ゝ

森なる鈴の源

名残なき世なれども杜の陰の源なる

東方自面しるし

霧そなる山の末の旅行して

大井川の源なる河内

とも我人をみ行しる

雲あるかとそれ山陰海なる

夕暮の山我述懐よせてよみ行しる

世の中我流なる山里なる

我ものとなる人をそれ里山なる

山うりの小屋のそなたなる

秋

萩

まみ人の風はそなる自然なる

物風の名なる

草花

枝なる

薄

我流なる大川の

大門なる

歌なる

なる

七夕

萩

我宿は萩をかこつてそこもとの茂り葉に秋風そふく

妙野

宮城野のもの悲しくそよぐ萩の葉に露を

旅行用唐

旅ごろもいとわるく独とぶくぐもる雲と幾日こころさ

霧隔行舟

こもりも小舟もみくまの多つまがが多斗りて雲は隠

女郎花近水

浪多てる氏川岸乃女郎花咲波をあらそふ

野狂眺望

くまぬなくて人めの多へのの如所花今さかりの形ちん

芳花乃秋

うら表秋とはいへとも芳花の萩の花は咲ぬ

月前の草花

漏とるさ月の光ゆとの秋ぬかてたる女郎花

芳林蛍舎会

麻芳蛍舎

芳ふれみぬ男麻も妻こふる群をいえて思てさ数れ

麻野遠近

法隆寺舎

いなりの山花ときけて秋の庭の窓の前ま男麻帝也

夜泊麻

芳林蛍舎

泊出て夜毎秋さをけてる秋の尾上の麻の数ときく

秋花勝春花

紀貫之家会

紫ふても面影よ咲さくら花時の色まて波を春のく

同餘秋月　法隆寺百韻会

名よるき月に二秋をみよとてや今年の梅をもてはやす成覺

麻詳何方　同

麻の帷方袖も涼そて岩多孫今こそ身さへおもふ成覺

爭名紅葉　同

はそひはる人も出さる立田の山紅葉袖にえん

殘菊失路　同

霜さのく山路の菊ハうつろふさへ梅ひなきる

古離荊蓋

ちかる色をいまそ刈多の礼をそ折る者利

隣家晩萩

風次第垣角くく萩のそをたそれはる宮をはる、の郷

待月

出ぬ月に山のいのるこそ思ひ出ぬ心や先そ月袖そ

法隆寺百韻待月

よもそそそそそ待月袖山の端をそ待ぬ心なりけり

為行　心袖

月清き今秋そみはる水底ハ玉藻さそくさいの数さ

月清　為行　秋勝　左大臣家会

ひかりとそ秋の月とや おそ月の光とそ月新

月　延徳二年会

ふる雪に垣根の賓ハ先清く庭ハ清くそ月新は

海辺月

任官の松のこずえより月澄のぼるを遠山

伊賀会所百葉会

同

浦傳ひするおの松の陰よりそ漕もるさ月ぬきうの船

三井当歌会之作

月清みあまつ雲をもとれぬ世をうきもそと行思ひそん

月

小町家

秋の夜も秋もいとゝ更ぬまは傾月ぬ秋ぬ秋ハみ

八月十五夜

名ゝ高き秋ハ二夜と知るぬ先ぬ月ぬ之ゝ

奇林蒐舎

月ハいとゝ今夜をみそ清れつゝ高き雲や山のゝそ

八月十五日夜ぬ月ぬ之ゝ

秋ぬそも多くあるゝ之ゝ月の夜ハ月ぬ人ゝ先四ぬ也ぬ

七十年秋ぬ月ぬ

経盛公賀茂ゝ会之作ぬ会ぬ月ぬ之ゝ

新やゝ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ

敷秋任官ゝ会ぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ

一ゝ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ

月終夜会

五明の月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ

雲間月

秋ぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ

清浦朝臣家歌合月

月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ

雲もなく山めぐりもみ遠ちまぼ月ゆへ今を拾い思ひぬ

月　　竹林院宮

くもりなくいまたる宿(にわ)の旅まい我もさやうの月をこめる

おなじ心

今宵これ吹風を多ひこめて古殿の嶽の月ぞ清

重家公の会

月

月新しうはこれぬ夜思ふ雲はるまし星人

海上月　　右大臣家会

照月を雲なくしてそ宵の夜み漕我もよるこそ鳴海潟

関路惜月　　月

入月を常ようとけるうまくまる足柄の関をこそとて

旅宿月

雨こそ庵八角(ひかく)林文科乃月をさりていくよとゆうぬ

九月十三夜　　法住院(ほうじゅ)殿会

波とうより廣田に渡る商人をそ乃月をめてさこめや

なるしん我

かくそうはやきそ月を今いくよのよん年れと我ぞこん

水月　　右大臣家歌合

新角ふも井実ようよ月をいるんいくとこそ山のその月

秋上月

心よとはつてやま秋くれ落秋の雁風のそのうきれく

暁鹿

衣をさめて立そる山の裾ゆ吹やあれ人ようれぬる

水上月　　為仁家会

月新を求とゝまとゝの海乃上ふゝ冬ゝ[illegible]

野風　　日舎

吹おろしはつ〳〵や寒なるゝ小塩山ゝゝの雪のゝ[illegible]

促織出

よもゝゝゝゝ織出ハ淺茅原霧吹ふ風や冬ゝ

野宿月

鶴の聲ゆ色花ゝふゝ[illegible]ハ月斗ゝゝあひ宿り

江上月　　青林菴舎

いゝやゝ新波ゝの芦刈て屋ゝる月ゝ漏も乃也

寄月述懷　　青林菴舎

この京都乃月ゝゝゝよゝあまゝゝゝゝゝゝゝ

月　　右大尼家舎

[illegible]る山の端遠き月新いろまて画ゝ我身なりけり

湖邊見月

漕出て月ゝゝゝゝゝゝゝ海の浦ハ山のゝゝ

霜曉月

[illegible]ゝゝゝゝゝゝ新ゝ[illegible]ゝ屋の[illegible]

海邊晚霧

見ゝゝゝゝゝゝゝ新波ゝ[illegible]ゝ

閑居霧深

霧分て[illegible]ハ[illegible]屋の市[illegible]

寄月述懷

ゝゝゝ月の光ゝゝゝゝゝゝゝ

月照巴屋　　青林菴舎

あるにつけても月にかこつ宿はなれぬ月をもてあそぶ人とりて作比叡山月と云題にて漢作
秋ひとつこゝやさすらん雲の上は月にまかるほどもこゝろ
遍照寺月にて
いそぐ人に行よ新蔵人
菊花
折てそぬ花にそあらぬ白妙の袖の移ゝ色をさすもの
侍従仁子合
女郎花
つれなくもさかりにそ女郎花なをいつまでと思へとも
ときたのみいつれの時ぞ女郎花露の深草をおいつしる
雨中菊
時雨ふる庭のくもれとも菊の上は色はまさりくれなゐ深

菊花待用
たちまちに北風吹ぬ白川まて待ひぬ菊こそ恋のさちめ
大納言実定仁の女房
ちとせ経て君にあはんと思へは菊の花をもてはやすらん
西
うつし栽て此年ハいつれを菊とぬ白川きり
惜秋見恋
ふもなき秋をうらやひ人ぬ身をそうらのうきさ
九月盡
実定仁家合の
物ゝ
秋ゆ
別ぬ本紫さ
ちとせ
行ぬ
菊花舎
行ぬ
秋ゆ
冬ゝ

冬

時雨

山ぢくる雲の下ぶかぬるん里とは雨さくこ

おなし　　隆信家二首合

雨さそけて雲もみやくこそ山ぢくるん里とは雨こそ

行路時雨

時雨ふる時雨ふる日ハ雪ふる弱ふ雪ふる

月前殘菊

月もよ菊ハ殘る世界ハ雪ふる殘菊

白菊の又ふるとおとろきぬ雪の下にぞ咲ける

月照山雪

時雨ふる雪ふる時ハ雪ふる月とぞくるさよの中山

冬月

神ぞくる嵐ふく夜の月ぞくれハ時をぞくもるぞ

紅葉に寄合

松ふる

月前殘蓮

月ぞ殘る池ふるのむもるぞやくもりぞくん

月前水鳥

池ぞくる月の光ぞくれて浮るあさぎの色ぞ

水上落葉

小白川ぞ

谷川ふるぞくの時ぞ世ぞくれぞくつ殘ぞくれハ

故里落葉

木葉ぞくるぞくぞ都の屋の面ハぞ殘ぞくる石ぞくなし

落葉

龍田姫袖を染かくれなきものゝ名残をとゞめしは嵐なりけり

かなし　　青林苑舎

積るは一葉もなく大荒木の森の下草まて散しけり

落葉入簾中

木葉散嵐やはけしく吹にけり玉のすだれも埋れぬる

大井川をこえて水上落葉をよめる

木末にも行かぬ井関にかゝるや川の枝よりも丹葉ちる

水上落葉

今は山の木葉も流るゝ龍田川の名付けるは

葉流浪水　　能花園舎

龍田川波に風ふけてこそ紅葉の袖もそめられ

山路落葉　　仁和寺にて人ゝ詠侍しに

木葉散山路の石は踏るに猶いろのつまをと

紅葉隔池　　能花園舎

かゝる池の行かた紅葉むらの人や船をとめけん

隔谷紅葉

紅葉ことゞ寄せやみつ城の神の岩根波しけて世は

落葉移落　　能花園舎

木葉散る者はかや庭の枝底にうつれる果は

枝流紅葉流水能瑕瑜官人ぞ寄合せ船に開路落葉を

都には先きまて見えて紅葉散しく白川のせき

おなし寄合に　　水鳥近別

子供四子鴨の浮巣にゆられたて捨しとまれや水隠も

月ん残　　青林苑舎

[illegible]水流れて冊生の川瀬よりの暮ハめるれなりなる立も騒も

[illegible]

霧ふる夜雅比寺鐘打るひもたゝぬるにうゝるゝ立聞後

河急千鳥

東女と移見てゝ[illegible]けゝ[illegible]の河原よりゝ[illegible]

寒鴨千鳥　　觀蓮寺会

[illegible]の夜八ゝゝゝ[illegible]移ゝの浦の波の代方よりゝ[illegible]

曉ゝ鳥

打渡る[illegible]の河原の[illegible]ゝ[illegible]ふゝゝ[illegible]れの[illegible]

千鳥

夜ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

時雨　　[illegible]会

時雨ふる夜雅の[illegible]

[illegible]

越移て今ゝゝ山ゝ[illegible]る時の名ゝゝ[illegible]

[illegible]のゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

閑居雪　　[illegible]林蕊会

雪すゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

雪埋旅路

雪降る山路の[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

雪中ゝ[illegible]

清雅ゝる雅ゝゝゝゝ雪の降ゝる山ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

枝打せし寄さ枝も埋て残る山路の雪ぞまばらに

晩秋雪

人まちて残る野原の道すがら立るみ雨雪ぞとりあつめる

待初雪

降されつる雪をとこそ思ひつゝ時雨に雪をまちそめにける

歌枕人遠西京の行合

志賀の浦波よせぬ所ゆ消ぬらん氏雪ぞ打まさりける

旅雪

初冬の角田川原の雪ぞ多まさる都鳥の羽

遠方雪

宰相殿遠方の行合

ふるの雪雪はの雪の絵せ殿は時雨ぬ日ぞのこかたつゝぶ

雪

今朝これは小倉山のむかしを思ひ出て雪は雪はとるふるの山風吹ぬし橋原打のそ行ふ色そ雪

雪ふれは行ふ雪ぞ打かくれ雪ぞ下ぬ雪も形

暁雪

思ひ寝の夢の通ふ雪ぞ形ふれ雪のあけ月

雪ぞ降り行りし朝よ花ぞ乃ぞ

山里ぞ雪を独ぞ雪よ雪ぞ雪ぞ雪ぞ雪ぞ雪ぞ

雪

思ふ雪ぞ雪ぞ雪ぞ雪ぞ雪ぞ雪ぞ雪ぞ

寄水述懐

初雪ぞ雪ぞ雪ぞ雪ぞ雪ぞ雪ぞ雪ぞ

氷

[illegible]ばかりやまなきの池のよしの鴨乃やうに
ある人のかが[illegible]て[illegible]なる君ふ振作[illegible]
朝まつさき者ふ[illegible]て出て我ふこん法をえんやうしや
こゝ
君のちよまん法を行物ぞこんもといそこゆつうこん
歳暮
かくれい我身と年も暮ぬるとかゝれ君ろとそ思
賀
よろしいこのん代人よみ作る
君ら代ハ千ゆ乃底のされ石乃形ハ[illegible]
おなし
君ら代を何にたとへんとそ果なき物我身たとへてゆゝめ

[illegible]祝心を三条院の御時人詠てよめる
昔ようときけり苔の山ちれと君ら代ハ[illegible]
紅葉に賀[illegible]
[illegible]乃柄をくらひ仙人の来てこゝろとそ君ら代世ちらし
[illegible]
構政殿下用[illegible]
舎せさ[illegible]ひて始而作文和
齢とりよとを[illegible]
春乃日ハ用まて[illegible]
庭松
みとせまて我をゝんとや君ら代乃ひさ[illegible]
祝

君か代はちよふの松の千とせまて住之てもみやふりけん

寄松祝ん哉　斎林苑舎主

行年の津ともり此浜此もとの松も君かよはひのなかゐなりけり

祝　二条院御時女房に替りて

ゆくすゑのためし君そみる宮の海は山や浦はしつか波立かへるせを

別

敦頼にのまの前へ海の里なる浮を見給ひ出にあまたまゐれる

によめる

むるくと別もと海かと老ぬまいふ名残をいつしとそ思ふ

清くへ海る人に餞御にとよめる

うつ月そと申しつる旅で立つよも漕別れは何になりせん

素覚入道塩湯あみに津の国なる海の里に侍りけるにつかはしける

立帰りたよりぬる我哉浦里のなこり此橋の形見くるも

登蓮か志の方へ旅と申て旅衣して侍るとて遣

限り行きは我そそれを旅衣今日よりは身をはなれそ

返し

うきことはみそちぬる旅衣ゆたかなる身でふるひもかな

旅

九月はかりに難波のほとりに塩湯にまかりける

侍りける法師光宗覚入道川尻におくれてまかり

たり後侍従出せりとて清息つかそ旅なる身に書れて侍る

旅ゐする方は心かられたおなし都や忍ふらん

又

君かすむ浦そ恋しくて我は都と旅に出ゆくへ有哉

あすより入るのゝてはらしうらし
暮れて行くはるの秋やいかなるん此塔よりは秋よりもひせ季
返し
秋とさて思ひよりぬる行秋の身よそひせは堀らくさるん
旅乃心を　寺林範舎にて
まよて行く都の方も山よ又ははくむらひて行むとまらん

哀傷

二条院うくれさせおはしまして後ほめみと大納言乃
三位はなく身侍りぬと笑る女房住つるかとゝへきつけるる
雲の上よ別し身川はおりおても一方ならぬ袖をぬらさん
別ふし君おかよるる芸人のは海へよひより袖そのくそ降
にひたり侍る女三年斗りるていな成る中のえ
さんな住る山里へさくりはらしてみのまつりき甚後ある
上達部乃むすまそのれらるよし申さて侍りかとに
よつるまいつてぬすあるりて身侍りうりかともえ
秋とや思ふれらん後上達部乃むかかるはそれ散る
うそにまた世の中の後袖なさは今よそもめぬる露や
ひらくをそのなとるはしたすし返しるすまにはされ成
よしをやて
けまもさそれて別し時なにも今はとこそはなかりし哉
ふへ—
あるをるはうそと人は思ひつまるきは哀をうること知るや
少将通家身侍りて後のゝ打つまさうりともいりて
をそくとぬらひはらよし身のなへゆきつ身り返るまよ

かなしさを歎くなもいつそとそふとをとゝぬと思ふれば

返

歎くなく歎くなしらせぬふそ思ひをとるとハ云る

月前催無常　右大臣家舎

限りなきは月ハとゝ生るうゝ人々ふなきせる

能無常ゆゑ

けるゆゑ徧文よ事付結句

世よハおと樂も文と書ゝてゝ孫よはてゝやるこそ遊さ

歎よおもくきしゝていはゝ又歎を詠を人をとハまん

源三位頼政家集下

意

思ふくもいそて思ふのそゝ夜なのうちゝみゝゝ礼ぬる成

月　前林荒舎

萌出てまゝ二樂なる思ふの表徒なるにそゝる歎成

思意

世之れる人ゝあゝん思はゝ打なけゝて取はゝ氣々を

身はゝ成歎くゝつけゝ思ゝゝも意を思をやゝて越後

人ゝれをゝよゝ心の目ゝゝんゝゝは我意ハゝいゝ行ゝ

皇后宮(きさき)花亮報補移長前合

さゝと志けよゝの乃市ゝ我ゝ思歎ゝ志れるゝ人ゝ有

思ふとハ表とゝ月志ゝ年ゝ有といふゝ思ふ四ぬゝ

いのちはとくかへしかの我らん小萩をみて心うる人をこそあれ
いたましてうるる思をとめてとうとうるまで相沈思をん

後悔恋

おもひてもうひなうるせる我恋を心のうちる思ひうくさて

数書恋　　右相院小宮

うくれなるを涙の色の紅を見もてきとて行つむ袖

恋　　清和院新院御

せをうる行ゆる涙の川のやき流ハ命よりおもうるみそなき

逢夜増恋

恋初て忘川を渡るよみ人　今ハいをたを行ひそあるめ

恋の哥

せを歌よる我恨てもなく涙思ふまれ多うるて

思ひ俺渡るよみ人やとこのうたいうるうる袖ハぬるさけ濡

隔川恋

山城の寿恋聖よ妹恋て貴交流の舟よもふらん

旅まそうるる人我うるとうるとうちそ人

よ海恋　　清行朝臣

なを此ふ涙の川舟うるをのぐうのしく我恋れ行つる

恨て行ふ川と元年我清和院新院ふ人清行

海ふ恋恨のう我化出て思返ともいつてうる

ふうふ川みを角ふかふ人ハまうる行る人ハとく

これ我かうるうるとて

水茎ハ先とうきりと書つめ川を我え取袖ハ涙なるる

せめてうるめる人のうとく流ハ川うる

おもはせ　我とこそ
心ようあるやうなる女とはこそ
思へ　ひとりやうなるこそ物を行ふ
ゑ　ゑ　女　山里よりとりあつめ
袁と　ことつれつゝ　ちる　花の
世のうきを思ふ　山里　又　ふ
くゝ
ひとりやうなる　我　まとわも
形をこそ　ていとは　恋　心
朝ゐ　恋　春の　寸　強み
和の袖　ふ

あひて　我　女　春　なる　世　月　山の
端より　出　我
ようなる　月　人　待　やう
ふ　人　ふ
はきなる　人　ふ
ゝ　ゝ　ゝ
あひて　池　水　ゝ
試　と　契　女　ゝ
て　次　月　人　ゝ
今　春　心　ゝ
筏おろす　松山川の
筏おろす　松山川の　浅瀬
ゝ　ゝ

小給仕

ゆるすう泪おちるよそ河川のきふ海されいくれさうし

遇不告恋　法和院訣宮会

若もせて人かよひる乃のくよ何家ゆゑて相ふらん

恋　播州六会

我の袖の涙の乃ひの薄なれ涙のよゝぬれとけまし

恋の心　小野恋　行振六会

君のゝと爰のうちのとかゝ隠なく涙ぬ見てのあとゝえてそかハう称

會後隠恋

ゆゑ行もゝ及ゝ暁逐會恋

終妹つもゝさゝる下ひとい待とゝまて打あふける

失返事　恋

返逆事恋

みをてゝる我心さゝめて待てくも泊てむな事ゆ

不語終隠恋

詳ゆり面ゝやり乃乃さ我行まぬるきんちゝる

改名隠恋

ゆゝてふ名我ハゝ思れハ我雑ゝ会ハ名ん

面ゝ我ゝて海ゝる恋の心我人ゝよみ待ゝゝ

引うゝ妹ゝ書ゝゝとゝ恋を振て今ゝ行ハなゝれゝる

恋の心我　桜宴会

ゝもすれハ涙ゝ之海も枕ゝる逢ゝ河磯の石ゝる恋ゝ

いとゝるゝ多我恨もゝゝ逢ゝさゝ又ゝとゝる我思ゝ海ゝゝん

雪降寺無て人々意を寄よみ侍りし
我意我さへ和てると思へ共是も程なきを思
行人をなき意行くるさま体むまとて行我を恨れ
忘れて程を思ひしるふ思ひ止とも

見家思出意　　竹林菀舎

意我これ和ゝそうなりれ家もの色すしるれとも
人忘れ色のけなる女のもとよりすし我こひよつ
りしうれ八つ八たとて
思ふ下ふと面もまろそ意なるの意なるこの八
女のことより面の涙自ばかりし重きる
面とふる思へ出と意おとふ色我ものとろのな
ふ

面もよるふ人のとりを思やゝ思へ我たもとに

過門不入意　　竹林菀舎

人をかれ明ぬ来ぬ戸我とたれ弱そてたる

蒲河意　　尾坂三合

ふとうまぬ妹ら栖を聞きは安く河川のつなぎなりう

待不来意

住吉の松とハたれと沖浪浪立ふるまとよ思ふ賀飛

行ふとい思ふ我

打ふ野上の星の時我そふ方ハ波ふりう

意ふ我命ふふる帝とふ方ハ波ふりう

今八月中我恨ふ、ふ我を思ひふふ姫八寄む

思ふふ浪八ふのなふふもふ家ふふふふふ

世中我なりけるあ程の年月世は何よりそくしく姿我意さし

歌林苑　　寛十七年内

寄妙の花ふるさとになるぬともひとつはなれそ忘られぬ

おなし

今はいさらぬ袖涙よりどめつる我ひとり我を我をはつめ

せきもあへぬたもとなりしてふる泡なる我うそこそ流まそう

奥山乃松のそもそり我なられや家意思ふ多我らかなる

今ハ自て意とゆ我れ和めともあはぬめさへそ涙なのうる

涙をとゆき今ハ我ふつきわとそ　物我

ふるもこのり寄そよるひくを蛍の長くや物我思ハ我ん

紅涙ふる袖のをなし多の後の涙ふるぬ悲哀この那

涙ふるまハ弱ふたなよ多意ふて意みも中とさくと思

来不會恋

往去ハ仲ふうきたる波たふ松乃移をみて海はや

寒夜增恋

さゆる嵐を人を恋しと思ふ移の花の下はらいはそう

意のん我

ふんてもう移て移のなどのれくそんるよ物我恋

あち沈句とハ思ふと思ふとを物ふれ移を恋を海

ふるものなふ意ふよ人のをとをはふ

ふ意ふなる恨を恋をかふくみの二筋なるふ物を袖の移

寄草恋

家をする萩乃下枝ハさまにふる家涙ふを人をたまに

涙をたりふる人乃もとつふ

きつてやせきもとめなて洞川なりたるもあるんなりたや

雨中情趣

君こふと袖くるせる雨の神ゆゑ心ちそそれ

ゆくうれくよ御胃殘こもる女の名りて

水の面よおそれふれて立ちよやあそ行る人を恋よ

祈神恋とゝる殘人くよみ行りるふ

逢ゆ殘行前うひなるふ法師恋をのくる名ゆ拾れ

寄源氏恋

寄牡蠣

人くれて拾殘を思ふ殘ゆ引ゆ殘ゆ殘ゆ殘ゆ

寄僧馬樂恋

いとゝまは角ふたいに妹門ゆ殘ひち笠の面

觀身不言恋

ゆやとそかくも寄みゆ殘ゆ殘ゆ殘ゆ殘ゆ

寄思財恋

わゆ恋とかくよりゆ殘ゆ殘ゆ殘ゆ殘ゆ

經國寄合

うち歌ゆきを行きにあゆ殘ゆ殘ゆ殘ゆ殘ゆ

院殿上會

後妬人恋

なこうれくも與一妹をせくゆ殘ゆ殘ゆ殘ゆ殘ゆ

大武二重家会

恋のゆ殘

袖とそとにおゆ殘ゆ殘ゆ殘ゆ殘ゆ

袖のうよおゆ殘ゆ殘ゆ殘ゆ殘ゆ

命ゆ殘ゆ殘ゆ殘ゆ殘ゆ殘ゆ殘ゆ

久しく吉信伝ゆ殘ゆ殘ゆ殘ゆ殘ゆ

まり乃祖よつ[illegible]
[illegible]春より先の山水浅緑果ぬとや人に知らん
かくやつ[illegible]れを物よさとりたる面白やて返るもな
[illegible]の年[illegible]月廿日比より[illegible]川辺りを
返

小侍従

[illegible]山河の緑果ぬとハまこを知るれ
ぬ[illegible]て物ゝ女の[illegible]て[illegible]日[illegible]の[illegible]時[illegible]川と云な
思へ[illegible]岩[illegible]山[illegible]も又祖となくいつもぬるのわ
立国歌
我[illegible]の松の[illegible]けよ[illegible]
寄石恋
いとゝ[illegible]我みさいはそ[illegible]れ石のくくる波ゆ[illegible]

寄菊恋

[illegible]ゆきとなるよ人[illegible]雪なるめ[illegible]る袖[illegible]物ひよきそ[illegible]
遊女恋
思ひ[illegible]ゆ[illegible]ゝとなるしめの在川とよ[illegible]玉川を
在郎無実
かゝ[illegible]と[illegible]ゝ[illegible]仆ゝ妹と我ゝ[illegible]ゝゆ[illegible]をよ[illegible]
寄山恋
わきも[illegible]ふ山のせいちゝハいのりとよ[illegible]て雪[illegible]
ゝ宮仕人をよひ生[illegible]て木陰よ立[illegible]
仆ゝよ時雨の[illegible]て[illegible]の高ゝ[illegible]仆ゝ[illegible]は
若[illegible]と[illegible]ゝ本陰の[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
る上恋とゝ[illegible]を

蔦のうる泊やとけよ恋後悔無
言生後悔無
はきいなかくてもおたすとあるまさいとぬとなる思うさて
云切後悔恋
さとの恋我さのひなる泊うる思ひ拾うもるれもたしうて
右大臣家舎
伊月悔恋
妹こふと泊こそ迎て悔無れ松のそらる風うる月うけ
時見恋
恋古の海泊干さかう磯の石とあれうう恋のえこのくれるる
関恋我恋
みこそうわれ神を妹う祈うんこと生うう我を知よ
秘知春恋
うとかうぬ人よい泊きう恋と思ひうそていさあもそする
秘後者恋
法住寺殿舎
ちうけとせあてる思ふむ章ハ家泊うひて我そもて約
返書恋
もれよ我ひく恋のあるひをいみうとみうくあくうみて泊
時逢恋
鴨のある岩根の池の落氷むうくる我や紅こをする春
恋名恋
妹我なれうとの祈のあるなうハ生ぬ歌よ吟よてまし
あう家後の女房我恋のひくむうこよはうしうう
しう暁よあうて泊うてきうしうは
さとこけき人恋人我約ていうの約とるく吟名簧

二条の院位の御時内裏焼亡とて人々騒ぎて
うきさのことをそえうそ安田果ねみ所のさなうれて
大弐重家宮寺会よ恋の心我後作る
紅の涙はうもる恋衣かへてはなを根をなる利名を新
失題不恋
いつこ我や妹うまつさかこ重て見て夜行を老われはうう
思後妹恋
津きなくいとあてないひをなれ我思ふ知ふうまま
王所思恋
うの心あるよいつ我を君いと思ふを思ひをとをて
恋
妻名をうるあんと思ふ世中の人心をうせねさをうき
独孤の家ハ荒れと妹うまもうをなる風ハ次うをおりよ
されいうなる我身のうをうる思ひをとを人のつさハ
思ふをうなる後たをせめてみて行ひをとをの恋を新
炉邊女談
くるよ雨と消ぬ人を中を雨を辞のをる体をみをる
頃和不合恋
逢ふハ行をうをの切えれいを我のをを行のをハ物舞
をめハ思て後をの思の人我人後作を
おをひをを新手枕をいをひを知ひをうひんをハ
思やをるとをひををの人
思をひをとをいをのををを
岩私恋

さしさハ海とそこて行あみゆふこく袖ハ波なる利　けき

富山恋

思ひも今こいさなのかひもなくしりめる袖とそ恋ふる

うしろめたく思ふ女ハ君さこそ恨ひなりて袖そ行ふる

何ふとそ思ふ白き帯ハ法さて海ふ来し袋也とそ

恋ふさ心中や後ふ多ふ思ひ形ふて

十月海とそ比大内に思ひよそこひ行ふ女ハ袋ふ行

ふ袋ふて袋とそ思ひ出ふ袋ふ思ひ出ふ袋ふ

白くふて行ふふ袋ふ

君さゆふて袋ふと君に行袋川ふ乱ふん

見ふれあまのやとふく女ハ袋ふ袋ふて海ふ行

お形ふ袋ふ袋ふ袋ふ袋ふ袋ふ

久しふ袋ふ袋ふ思ふ恨ふ川ふ袋ふ袋ふ

とふ袋ふ袋ふ袋ふ袋ふ袋ふ海ふ袋ふ

ま袋ふ袋ふ袋ふ袋ふ袋ふ袋ふ袋ふ袋ふ

時ふ袋ふ女海ふ袋ふ袋ふ袋ふ袋ふ袋ふ

袋ふ袋ふ袋ふ袋ふ袋ふ袋ふ袋ふ袋ふ

思ふ袋ふ袋ふ袋ふ袋ふ袋ふ袋ふ袋ふ袋ふ

袋ふ袋ふ袋ふ袋ふ袋ふ袋ふ袋ふ袋ふ

いやなやん袋ふ海ふ袋ふ袋ふ袋ふ袋ふ

袋ふ袋ふ袋ふ袋ふ袋ふ袋ふ袋ふ袋ふ

和歌とみるせそるもちふ梅香ハ海のまよ三ふ袋ふ

毎て久しく成ふる女のなかふ月ふる袋ふ

めふ袋ふ袋ふ袋ふ袋ふ袋ふ袋ふ袋ふ袋ふ

[illegible]のこゝろ八ゝ[illegible]のあやめ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

う

あやめ草その根よりてかくとしの家種を離
れて久しく敵する女は思ひ出て又月ゐるよ長き
根ぢ[illegible]ゝとそ
あやめぬまのあやめの根をゝたゝ[illegible]涙[illegible]

[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

右大臣家舎

曉恋

鏡の言を独ぬる歌もいとゝ[illegible]
後朝乃文[illegible]
思ひ[illegible]君を始てけひ[illegible]

[illegible]

明ぬとて[illegible]涙を[illegible]
もゝ[illegible]

遠書待恋

[illegible]草[illegible]ゝ[illegible]思ひ八妹[illegible]

絶行守三河[illegible]
る[illegible]

八橋と[illegible]涙と[illegible]

かへし

八[illegible]ふ[illegible]を今[illegible]
袖の水を思ひ[illegible]
流てと[illegible]

返し

逢見れといとはや白川の流と君は影まさる縁

寄衣恋

我為はうつくし妹か小夜衣いく人に馴てきるらん

近隣恋

立そわぬ時のまてなきはきもころ隣はへたてぬ中のひとまは

行路恋

とゝめても我心をやかよふらん君か面影に添てこそ行

欲説恋

恋しさに忍とて袖ふる我をもみな孫八せん人方をたなか

たくひなく思ふ男の本意みつからの女に語りて

そのかみにはなかなかに恋とやかりにかよひ見るそ恋しき

恋

人知れぬ身をかこふの下の水なれや我袖そぬれあはるなるほとに

思ひきと思ふをそともはつれぬに我胸にたくくるひ之けり

麻衣そのまゝひとりあるをハとゝめともつくぬ涙なりけり

人心あきてる宿の庭にまよふかるかやのはまなきに

久しく音信られぬ女のもとより恨つかはしとて

思ひきやあまの刈藻に住虫の名残ハ涙より袖そ濡

返し

海士刈藻にすむ虫の名残ハ君か袖ぬらしつく

思ひの心我

渡川多残ハ袖にせかれきりやかなかせるに流る我なみてもと

何ひのつらん女の所へしとてこれか契と嬉しく

布留住ける山里へとくりつかはしてそのつらさに

ともだちなるくさぐさの作人の作りたる
名ばかりのまがりたる身なりせいこうりて拙き思ひさまし

西

うるとしとしたるなかなかよき名ばかりのもくむ親と我とを軽まハ
あさなくてうたるなくなくぬてはいのひとり
らひて作りたる女郎花よりはかりなる
をみなへしうるはしき花の盛りをうつさんとぬる

悲

為家卿歌合より

為家卿

白波の軽きみやさうきを白波の

旅意

妹とまちくにいりまとより歌初洞と我とをうつ我と海の称

日

右大臣家合

思ひ出ぬ妹ぬくあてうらく渡いわのもとのやうかとハ
七月十日比より人の年く海のうて作る遣ひけ
年ぬつまとと軽の分さ長よとうる長と思ひさ長ぬ

之一

七夕は物をうりとうとは云ぬ絶月も歌うさ思
久しくとはれ作る女十月朝月はよりたた
ひさぬ菊より分て作の一首

思我我秋ぬ分てぬ名のわる菊ぬのひとはなぬ

小侍従

西

いとやはひ老ぬ菊と軽まれを人の秋もてよう
さて程へて渡うひ名ひ菊の分て見が老る
ひさけぬ我妹ぬてぬと菊れ軽うとなく移ひよう

返し

うつろひし菊の籬を恨むとも我身は秋となりぬれは

後朝恋

かへるさはまたいつとも思ひしに頼みなきしもの人は恋しき

日数へて待し逢夜は涼されとも恋しさまさる床の涙そ

見書増恋

増えてはふみ増る我もてや思ひそめのふりてなりなん

返書恋

待ちて行ふみちせん見れは我おもひ桜まて見しこえつゝは

隠僧女恋

清住寺辰舎にて

忍ふれはなほ世の中をひたすらに下くちは物思ひ何しよ家と見え

逢不逢恋人恋　月

陸奥の緒とは恋て結ほれぬ妹らかよりし此ことそ今も変らぬ

観身不言恋

数ならていひ出る我か止むる夏身や恋の実と成らん

女のおとけたる恋は今は待まちて浦山ならん

何かわ此思ひの下紐も結ほれそれと思ひなりなん

恋の山我人に帰りする

清きことなき人は偽まちて見ぬ恋の袖ぬらし泪ぞ

冬ふくれは鶏も涙に誠有此海の我まてもなくのつらくは

今はさは恋もされし人をなほそほまたる人のうへをもみなくよ

妹なくは人ひたすらに鶏の声ぞ鳴きける夜ふかき後きまとめまし

志ほりあへぬ花染衣袖色うつくかゆるみまでし　て年の寒けく

下女ぜんといふるゆ
我心ゆゑ行ゆくとて法くとて
宵章の心ぜ
なとて家と斎厨袖ぜぬ
あゆゆゆ女恨もる
とする由ぜ今
さんとて酒ゆたるふ
とくくこ唯て
拾たるさぬぜ
ほるを斗り濡たる
て袖よ書付てゆ
今ハとて脱ぐく衣ぜ袖
おきはを秋の雨ぜ
堂行ゆれ
ゆ人ぜ物ゆ
句雨ぜていまて
ゆれ
ゆくもるる拾て
ぬ袖
袖ぜ濡ぜ
ゆゆ恨ゆく
秋袖ぜぬぐ

二月廿九日比ゆ南厨の前ゆ
ゆる女房のゆとゆ
中ゆ酒ゆを
酒と沢雪井乃ぜ
かく
花ゆる匂ゆ
を後又大内ゆ酒ゆ
花ゆ散ぜ
小侍従

花ゆとかくや恨ゆ
ゆる笑て内人のゆ
ゆ思ゆ拾や
袖ぜ
ゆ
おゆ人ゆ
ゆて拾て
ぜ
ゆ
ゆ

こゝし

花さらばゆきちらむこゝろの我人とてなくて問ハんとき

あまり人の年へはかりなき

あふ坂越ぬ物からてよのまし涙あかなるそ袖のぬるゝは

返し

ゆくえれお坂山乃岩志こゑ手にうけもつ涙ハ流さぬ我

おなし人のなよりうる此桜のさ流をこうりける也

さくみよこゝかせよとて遊ける桜の花散もつゝしさは

わろきしのむとすくみハ流りもりまして滴ちのこき人ハいくハ

うくし

ときの花我流しの秋よりもはやくきるハゆかしとそ思ふ

五女子始来て物しよよおほつらうりいのこゝろひて

ゆりて郷よ絶りしける

あはとせんかとほとはうぬれは安からさんとおこの世は縁きらん

むそり乃日比車みなちてそれきと云はかりありしかハ

七歳してハおもらぬ身ふとにひて見せぬ急ことハ先我思知ぬき

思ひをもる宮おも車ハうてもてそさんハよひとまそ完

幸せまほしくとなり

あさてんの花ゆりうて幸せとやかなる女也返しよ

きみひらふひら家そゆし書み上の花ハよりとよ行のひかりふ

返し

今を知来死みきといひあして山とるる人秋をむへしとは

女よそしめてかへて郷よつけける

越ぬとこそえしそ見へね今逢坂の関よもやとゝめ我こそせん

えー

いそきはるきてきみおもはぬ
ちはやの浦波をよつらして
逢ふ瀬待ちとて寄せよとぞ思ふ

匠

はるをまつとはなくぬ歌をそなたより
はつかに見て後三言者伝伝ふ
ちりしぬ小侍姫

えー

とうなる浮世の中をうくるとはくるる
ふくー

いはいをまつはをくれ君を待ふ日のまを
久しく吉伝ふ女性やなつかしもる

匠

と歌のようなひいて行て三ヶ月ーとハ
玉章を文をもる文字八君と我をうりんさと我をもんん

紀行未無

三ヶ月蔵会

未まてはとはるひいて行はあるより秋ハ彼ハ家とそうぬ
恋の乙鉄

命絶ふるかてんと思へかるもまたそ先を思ふ
不役彼恋無

たそうるさそいつりとや天をうていそうと秋新抱賀新
欲盗恋

東屋鉄ハ何となりて姉を我ひくそうの名鉄やうな
曉を人を送りて浦よつりーる

みちのくにまかりける人に侍りける所にまかりあひて
侍りける

思ひきや雨と降りし涙の玉の井にまがふ袖の上とは

夜恋といへる心を詠侍ける　藤原家隆朝臣

秋とだに吹き初めしより幾度か袖に露置く山の風

くれぬとも人に知られぬ恋しさの思ひ入れぬ日だにぞ

なき

とて今宵信濃の国へ下りける

思ひこそ入れぬ日のなきなれば人やは分くる山の

紅葉

紅のうつろひ染めて色深き山の風

一会之後不会者恋　法林花舎

よはひ積りて老の恋　年を重ねて恋に耽る　法眼寂蓮家歌合

海とふる恋のやまひを何とかはそれかれとなく思ひ

あまりぬる渡の川乃浅き流と妹らふみ見るはまさりぬる

しらくにんうよかるよ芹摘みしかとかくれて袖ぬれぬ

生隨不會恋　法住寺殿御歌合

袖ぬれぬ恋のよりあて雨やくはるる雨のぬれを思ふ風流

恋自我身人　若狭二位家合

我友と恋ひやはうん後の女の法師なる袖は結ぶ恋をまと

恋

恋ひ恋ん後ハ煙とのぼりなる雲は消えなくとも風らん

絶て久しく成る女又うつろひる今恋ふまじきうと

咲て後葉て枝毋に清水ゆ[illegible]
[illegible]

人とみなむとふなれば忘れ我のこゝろぬんちゝをとれ

橋上行人

姉をいとて市場の橋上行ふん よく方となるなとを枝き

意を知人

いく枝をそいくこゝろなるて咲されめるとやなるとにいつ人をなる

老後意

逢ふを待てなぬてよさゝぬさるゆさくたるゆ我身と思ハ

年老後思後ゆ[illegible]

行てゆこゝろひて後つゝ[illegible]

[illegible]ぬ我ハ思の屋ようれをとよせぬハ老の後をあゝ我

[illegible]

老の後ようなれハ方法ゆ身とハ知ゆ

[illegible]人のゆ[illegible]

年ゆて[illegible]ゆ[illegible]の行ぬ筋なる物を[illegible]

[illegible]

朝行髮さゝ我ハ老の乳をゝ後の新のこゝろ筋ゆと

あなゆ人のゆ分ゆ日ゆ[illegible]ぬ[illegible]

てつゝ[illegible]

[illegible]ゆとゆ[illegible]ぬ[illegible]ゆ[illegible]ぬ筋を[illegible]

[illegible]

[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ぬ筋[illegible]

遊夜宿客の句

日ぬ[illegible]

祈佛恋

人[illegible]

雜

世の中を思ひ捨てて京の八住俗て無[illegible]不り

義長て作る曲海の三位六位まて作時四位人より[illegible]ぬとき

よて恨いひつかうとて

思ふ[illegible]

婦[illegible]

歌人おりて次の日[illegible]る女房の句

思ひやる雲井の月よりなほ[illegible]

女房よみ人[illegible]

雲の上[illegible]

地下より作る時四[illegible]

いとてとて女房の句

あとの[illegible]

大内護[illegible]

なる比紅葉[illegible]

かくれして作る月[illegible]

人[illegible]

[illegible]

かくてのこりなく世をすて尚今は世時飯上皇されて皇
法の法の京湾てせ(ふ)ん中宮亮重家の女(つ)をもてなる
きとにや本院ことしの春より今は立出て法ふ法にもれる歌
西
うよやけよ本院ことし山ゆ法行ふ法月をみるれ和歌
お歌比叡宮院大夫敦光ゆ悦ひ云つ法ふとて
ふきや思ひ出ひけて九重ゆ雲井の梅我とあかさんん
西
武蔵のこ行ふ法今かハくもうれしておもしろうれ
二代乃位は昇殿して行時三位大進法補殿ゆ(つ)をもて
立ゆる雲井ゆ出ることつてん独沢ゆ咲とつけなんん
西

諸共ゆ雲井ゆ法ことるこりうは秋ゆて法なるやまゆ
蓮華王院の執行静賢同比悦ひゆつ法ふとて
本院ゆとりゆ月法雲井ゆて思ゆるくいろりゆ法ん
西
本院(院)と行歌をんふゆよ西雲の上ゆてこゆるはきゆく
右少弁親宗朝臣比悦ゆ法ふとて
五月乃出ゆこゆる雲井ゆまゆまゆ春ゆ人通ん
西
長歌ゆ出ゆこゆる月新ゆる近ふくゆ雲の上ゆ姫ゆ
正下乃加藤ゆて行時右馬権頭隆信ふとゆ悦
ひつふりんとて
和ゆ共浦ゆ立のゆる行ゆる波の音ゆ十ゆ雲ゆ姫とて字

いかにして立ゐかるらんとゆへしと云ひもよらぬ松か浦波

返し

加階は後住となく殿上はゆるされつる事有てかゝ納
言資隆かたりけれ侍中つかはしとて

位山のぼるふもとの松の上まてゆかん物とは

返し

霧をへさひふく乃ぼる位山雲路ふとまいかてなからん

月よみの乃時中宮の大盤所よりとて
くもゐ山さかえぬとてや侍ふやのて雲井に出る嬉しさ

返し

のほりけり位の山と雲の上を年ふることにあひしとて出す

殿上の子の比女房大輔か返事つかはしとて
ときなと官衝ずもいつする嬉しさ比ちめいは夜や天の羽衣

返し

秋をは色ちかく枕かはれるを比かさねてむかし袖の枝をに
侍従侍ひを二度して修理之三位大進清輔朝臣もとより
いかはり秋をせさく出ぶらん雲井に見ける露の毛さくらも

返し

知けりな雲井の比おもひて鳴し乃立の月をまてとも出ふん比

昇殿の時是彼より悦の旨とて遣しける大納言
實定をそへていつかはしし是は是より
雲の上比思ひ後すされ千鳥繊おもひぬる心地そ出ま

返し

雲の上に千世をやちよと遊ふつる鶴は久しき物となりけん

祝言は法華経なれども皆こゝにまてこれを彼岸
本願とは[illegible]の月うは[illegible]あれ[illegible]を衣とや思ふ

西

さうくれてその衆の月よ乱れ[illegible]と[illegible]井[illegible]ハ衣と[illegible]
年は内五位の上下[illegible]て[illegible]月は四位[illegible]て[illegible]
[illegible]ひ[illegible]て中宮亮室家
[illegible]衣[illegible]る[illegible]今[illegible]や[illegible]

西

[illegible]白[illegible]嫌[illegible]
昇殿の後[illegible]て[illegible]時亮[illegible]服[illegible]
[illegible]や[illegible]井[illegible]の[illegible]れ[illegible]の[illegible]と[illegible]なる[illegible]

西

[illegible]の[illegible]の上[illegible]ほ[illegible]ふ[illegible]
誰ともなくてさ[illegible]
[illegible]て[illegible]井[illegible]思[illegible]
[illegible]
別当[illegible]大[illegible]
[illegible]と[illegible]
[illegible]井[illegible]
女院百日[illegible]法の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]中[illegible]権大[illegible]
[illegible]
[illegible]水[illegible]

歌

青柳川清きよみなかれ関いまし水はやくさくちらん

されば伊勢の敦忠の中納言山左衛門督をとしころ

出仕とりなる事ありしに

初て参たる女房正月朔日の日の松ぬの袴

今ようの事を移の日は松ぬの袴にて思ひ御ふ人を引ら給ん

別当定大納言おはしまして四月十日に

松ぬ袴の事候うりて面のしの袴にて後せ引給

松ぬ袴はさりやうん為れ事物ゆるんかけてとりぬ

歌

為れ事なるのはい又をとまつるよみをとき人なりけれ

後下なる事ぬ歌を作る法すべし

思ひまつ年をへぬ枕をとりよりもうもりてけんとのとも

述懐　敦頼　任官の奇合

渡る年をぬとりは涙をまるる松ぬ我身はさくひなりける

於南殿大臣大納言かねて出きりと定てうことも

安きりしょうの松ぬ袴ぬ為れ安堵て被芸為元年七位

おはつうな答より出り賞を拝まるいとハきこれるとの我

さ乱れうくらるるを松て祝て位のつりてー

さ為をぬたまふ為れ山義れ之ふ為ぬ為ぬ袴

歌

ここをて松ぬこともきうん山義の思ふ心ハいくこるる為ぬ

昔今れる我つくとこひはくくふ衣服ぬと更て作ん

いろくようつもる云の者ふる渡の義の主をとりけ利

別当金屋[illegible]て後とゝひゆるもゝてゐふる
はのゐて行へて後山里ゝきゝ行ふ[illegible]をしる所
さゝ我ゝゝゝゝとこゝろ人の人我さゝ知めれ

西

はしりさゝはゝゝゝゝと人ゝれた歌ゝるハゝ生みゝう
名羽院ゝゝれさて後ひて後高林苑ゝて人ゝ
懐而と云ゝ我後行ゝるゝよめる
もゝ我ゝゝゝゝ月の入ゝゝゝ世ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
寶莊嚴院ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
静賢ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ明ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

西

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
年老ゝゝ乃ゝ月十日ゝゝ亀橋ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
橋ハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

西

附ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
小行後ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
我ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ

をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
帥中納ゝ顕時ゝ四人昇殿せゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

雲井まてみをのほるなる水川のみハいら成たらし立初らん

返し

川つまて雲井にのほる身の子ハ三瀬帰をにぞほしとそみ

蝉の小川の流つまる人をまはこく讀まてたるらや

少将別当入道宣化と中将にも相伝へると比聞

とゝ侍るれは申てたゝちにいそて相逢なへてしかるとこ

きる往に青林苑まて入見の新供侍る日無恙て卉

讀奉りて法経とてひくはうりまる

言はみえ光まれつゝ色てみさる我こゝも後み伊らね

返し

思ひてみる我らんことを後へ思ひさらぬる是ハさるはかなく

上達部上人のまつ大内に落られるに三位大進

清備みち我出てさしつらねるかゝんや侍るは

紛冬なれ昔の百敷や花のたよりにみんてとそ雲もさそ

返し

孤まらん昔我思ふ袖の上におちる色とや露をさする涙

岩倉(かうざき)に三位中よ色わくひく出家のよし我さすて

とふらひつらんとて讀る

三年まて思ふらん立川なれ共真の道に入きを見れぬる

返し

ふかり紛ひ流の山の近きをれハいさゝ入ぬる道とぞきらん

月入道のまか筆我使はれとて法の我に書付て侍る

やるかたに筆に波そさほれぬる我ゆへはつれかるもつらさめ

返し

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いま我伊賀金堂寺にいたりて
西海の波に心の月は永く亀井の水に沈むらん

西

我心うみのごとくにして月は永くそのうつりぬる
ことわすれず金堂の中にいたりて
法華経をよみたてまつる門むかひすることなかれ

西

無量義経をよみたてまつる海は舟をうこん西門が
真言金堂のかねを聞くなり暁のおきてはたらく
ことをみよ不思議なる仏法
都にて我いとこひしかりし海うるさみ岸くやうまつるまよ

西

法華経をよみたてまつる我をいのるこゝろ
さとりとなるこゝろこゝろ念仏所にてよるまこの
こゝろにてきりとよりはつるまで経よみなどせし我伊
賀金堂寺にてけふ門をしめ侍鳥ふ
多ひなりてこゝろにて思ひ出る我門
むのひとこゝろみ仏ゆるるこゝろ我ゆるしたまふ
こゝろのほとけて後人をのこる三年をつゝ
しこゝろ

行やひくつとめていてる物をの門むかひて思ひ出られ
思ひやる秋のきしの法の舞立長よ身をたゝやはまる
さてみはるるみてこゝ八松風我ゆく心ちして身はたゝ
西二月三日我伊賀にまのけて

琴の音をきゝしのみりと立ち出し秋こと葉の秋の夜

ある人のもとゝ[illegible]

[illegible]

秋ハたゞかゝみ浮世を長なる春の雑[illegible]

如席大傅

和哥所の人々にのつまりてよもぎうの哥よみ連哥

なりてのちそれ作る陽[illegible]

れ[illegible]

[illegible]

[illegible]

いつ行くべき月日よりもとかの日の妹をまして春ふかみてをそろかる
大夫公俊惠の坊の坊のめかさ角のこの西
の後作上坊をみかりの作
月とれとなるべくふる国乃上に行やるべく裏なきる後
西
をうをうを思ひをうをうを毎のをうの作の板写は月は也ことと
南殿の中のうきるへ人を毎て後より名うをさ知へ
ませんをとちきりてをくしく名作を作をうをし
うば東月は世を金りのほどを云つりしうをる
さん春は雪は花は秋は作つきてをれ也へみてをとを尾
西
なれ加と雪は也をのかさとをれいちをうちりてやをうと徒

景時の三位入道のちかふかへよ滝のをうを秋をうてを
滝のをうを酒とのを秋おを一つ春をうをを
てをれいを角ををなををををのおをををるをを
秋ををを毎をををのをををつりをる
をうををとをのをるをとお同北 滝秋をを祝をを見ををとをれぬが
西
夏の月をのををををお滝の糸秋君をんを加ををりやさ
いつををりて作女房二月十日比大宴を歌より秋
当をを法のりをををる
春なをを我(秋)のを山を人を紅葉秋ををて春秋をを
西
あをを之花のををををを秋のを山をいををを西

如渡得舟

[illegible]

人也新共此第て一京絵書くせしき作る

今日[illegible]行れ

勧持品のんを

今日[illegible]行れ絵ハ佛と[illegible]せをとりてや我我恨[illegible]歳

化城喩品

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

敦賀より西ゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]